

は毎日泣いてのみ居るに、格太郎も心中に悶々絶えず、寧ろ妹一人を廢物にして仲小路との結婚を許さうかとまで、思つたことも再度に及んだが、ひざく渠等の術中に陥るかと思へばそれも口惜く、不愉快に日を送る内も、彼の静枝の事と武彦と協議した事業のことは忘れず、外國の書物など参考にして、一通り設計書も出来たので豫ての約束通り武彦に會見せんと、前日無名の郵便端書を出して通知し置き、翌日抱へ車夫長吉に自用车を曳かせて、熊内へ迎ひにやつたのである。

隻腕の巨漢は、三分の好奇心と、七分の事業的熱心とを以て、我が曳かれ行く先も訊かず、長吉に運ばれて高島家へ来たが、門を入つて梶棒の立關へ着いたときは、其の立派なる家構へに、やゝ驚いたやうであつた。

奥からは早速格太郎が自身出迎に来て、案内したのは彼の西洋室の書齋である、早くから吩咐であつたものと見えて、二人が卓子を隔つて椅子に凭ると、最う珈琲や菓子来る、三方の硝子窓は陽氣に開け放つて、晩春の庭の活々とした樹木の色が、強

い日光を浴びて、此の室内にも反映するのであつた。

武彦は珍らしさうに周囲を見廻して居たが。

「イヤ總ての疑問は今日で氷解したですが、然し吾輩には、猶一つ疑問の解せぬところがある、實は今日まで、何ういふ身分の人であるかと、それを疑つてをつたですが猶今以て合點の行かぬのは、一體何んの必要があつて、是れまで身分を隠してをられたですか。

「それをお訊ねされると、甚だ面目ないです、畢竟何等隠すべき理由はないですが謂はゞ小生の習慣性ですな。」

「習慣性？」

「爾うです、貴郎は小生の父を御承知ですか。」

「知らんです……。」

「御承知がなければ今日は何もかもお話しして了ひませう、小生の父は余貸です至

つて世間に同情を失つてをつた金貸でした。尤も父は一個の信念を以て金貸業をやつてをつたので、徹頭徹尾自分の主義を貫いてをつたです、其の主義と云ふのは嚴格主義とでも云ふのでせうか、契約を履行する上に於て些の情實も容れませんが、随つて冷酷の處置に陥つたことも澤山あつたやうです、世間からは餘程憎まれてをりました、小生は即ちその倅です。』

『ナル程——』

『父に敵が多かつたので、自然小生にも敵が多くあるやうな氣がして、幼少の時から世間の人に、高島純藏の倅といふのを憚つた、其の癖が今以て脱けないのです。』

『お待ち下さい。高島純藏と云はるゝと何つぞや二十萬圓を、學校の教育基金や慈善團體へ寄附された。』

『左様。父の遺志に基いて、小生が夫れを實行したです。』

(五十一)

突然卓を打つて、武彦は歎息した。

『ナル程、敵がある……』

『敵?』

格太郎の眼は異様に輝いた。

『吾輩の知れる限り一人あるです。』

『一人?、それは何者ですか?』

言葉が少し急込んで来る、武彦は暫く考へて居たが。

『こりや何うせ解ることだから、寧ろ今の内お話して了はう——松木静江さんです。』

『エ……』

格太郎の顔は、殆ど土色に變じたのであつた。

「然し貴郎までを、豈夫に敵とは思はんでせうが、約り貴郎の御親父たる、高島純藏さんに對して、忘るべからざる怨恨を有てざるのです。夫を吾輩の知つたのは貴郎が御親父の遺志として彼二十萬圓を寄附された時であります。新聞に出たのを見て、世間には斯かる篤志家がある、吾輩の貧兒教育も、斯ういふ篤志家の後援があつたら理想通りの事が出来るであらうと、思はず其のことを口にすると、恰度其處に居た松木さんが、急に涙を流して、妾は此高島の寄附なら必要があつても受けませんといふ吾輩甚だ不審に感じたので、其の理由を訊くと斯うであります。元静枝さんは此の神戸の花隈町に生れて、父御は銀行家であつたが事業上に齟齬があつて、一時の經濟難縫策から、家屋其他を抵當に、貴郎の御親父から金を借りたが、期限に際して償還が能きなかつたので、いろく事情を訴へて延期を頼んだが、貴郎の御親父は承引をせず、遂に權利を履行する事になつて、抵當物の總てを引渡す、此心痛から病氣であつた静枝さんの阿母さんと云ふのは死亡する、父御は社會の信用を失つて、神戸では

再び身を立てる事が能きなくなり、哀れな有様で一家東京へ退轉した。それは静枝さんが未だ小學校に通つてゐた時分だといふが、東京へ出てからも頗る困難したのを、兎も角生計の道を得て、貧苦の中から兄さんは醫科大學を卒業する、又静枝さんは高等女學校から、女子大學を卒業するまで、具に艱苦を嘗たものださうで、それで父御が死ぬ時までも、お前達にいろく苦勞をさせたも高島の爲だ、高島が人情を解してくれたら、斯まで窮境に陥らないで濟だらうといつて、餘程無念であつたらしかつたさうで、静枝さんは其時子供であつたが、當時の事を思ひ出すと、高島家が怨めしい其の高島純藏に教育事業や慈善事業に大金を寄附するといふ、そんな高尚の考へがありさうに思はれぬ、若し遺言であつたとしても、今迄多くの人を苦しめた、その罪亡しをする意か、又は遺族の人が世の同情を買ふためにしたので、孰れにしても誠心誠意から出たものであるまいと評したので、其時から吾輩は高島純藏といふ姓名を、強、腦裡に印象してをつたのです、然し今門を入る時、高島と書いた標札は眼についた

百九十六
ですが、其の高島純藏さんの邸宅であらうとは思はなかつたです。又無論貴郎を其の人の御子息とも思はず、イヤ、斯ういふと何か吾輩までが、逝られた貴郎の御親父を攻撃するやうですが、吾輩には素より恩怨がない、吾輩は貴郎の人格を信する、只貴郎が習慣性になつて、自分の名を容易く他に告げることが出来ないといふ、それに深い同情を有ちます、又松木さんにしても、貴郎に對して左や右思ふやうなことはないでせう……………」

(五十二)

父が多くの人に怨まれて居たことは、格太郎は素より自覺して居るから、僅か一人の敵があるといはれて、遽に驚くことはないのであるが、只その一人が松木静枝であるといふ事は、殆ど青大の霹靂のやうに聞かれて、眼さ、も眩むばかりに驚いたのであつた。

格太郎は是れ迄静枝ほどに、婦人に對して尊敬を拂つたことがない。口に出さぬが妻にもと思ひ込んで、晝夜忘れなかつた其の人の一家を、苦境に沈め幸福を奪つたものが我が亡父であると聞いて、強い感動を與へられたと共に、一種の怖れと、堪へがたき失望をも覺えて、咽喉は塞り、手先は顫えて、暫くは俯向いた儘であつたが頓て又慨然と顔を上げた。

「松木さんの一家と、小生の父との間に爾ういふ關係のあつた事は、いま初めて聞いて驚いたのですが。實に小生は誤つた事をしました、社會へ對しても又亡父に對しても、濟まない事をやつたのです。今貴郎のお話しにあつた、二十萬圓の寄附について静枝さんの仰有つた事は、小生に大なる教訓を與へられたです。實際彼の二十萬圓は父の遺志によつて寄附したのでなく、幾分にも亡父に對して、世人から同情を與へられるやう、肆に小生が父の遺志と稱したのですが、今になつて考へてみれば、全く社會を欺いたのです、亦亡父としても、一般債務者へ對して冷酷であつたのは、

百九十八

先刻もお話した通り、無論偏見ではあるが、兎に角確乎として動かすべからざる信念を有つて、生涯其の主義を變じなかつたので、決して自分の行状を不正當と信じてをらなかつたらしいのですから、それが爲に受けた悪名を、小生が金銭を以て消滅を計つたは、全く亡父の意志に反してをるかも知れんです。小生はこの誤つた見解から、貴郎と共同經營でやらうと云ふ、今度の事業迄も、父の遺志と稱して、貴郎を欺いてをつたのですが、之も改めて貴郎に謝します、又小生が此際最も恨事とするのは、亡父と松木さん一家との關係です、小生は静枝さんに對して、大に尊敬を拂つてをりました、極めて露骨にお話しすれば、能ふべくんば妻として迎へ、小生の社會的事業に援助者になつて貰ひたい希望をさへ有してをつたのですが、今はそれも水泡となつたのです、静枝さんは今迄小生を高島純庵の件と御承知がなかつたから、温情を以て小生に接しられたが、今後必ず敵の遺族と見て、小生を排斥されるでせう、小生は甘んじて排斥を受けますが、若し排斥の結果として、今度計畫の事業にも干與されん事になりはすまいかとそれを、頗る懸念するのです、静枝さんの如き人物を我が同盟者から失ふのは、事業の爲にも大損失であり、亦社會の爲にも大不幸と云はねばなりません。小生は小生の譽と、小生の財産を捧げてなりとも、亡父に代つて松木家に謝罪し、静枝さんをして長く我が同盟者の一人であつて貰ひたいと思ふですが、貴郎のお考へは何處ものでせう。

「言々句々肺腑から逆り出づるので武彦も妙からず其の熱誠に動かされた。」

「一々御尤もであります。吾輩は貴郎が肆に父の遺志と稱せられたことも、決して不正とは思ひません、子として親の名を美しくしやうとするは、人間の至情です、譬へばお父さんの意志に反しても、お父さんの見解が誤つてをつたら、それを正しいものにするのは即ち子たるものの義務であります、社會を詐つても社會に益すれば、毫も願へて憚る所はない、只静枝さんのはうは、吾輩一個の考へでは、今明確なお答へは能きんですが……」

と其處まで云つて、又沈黙に入つた。

(五十三)

無名の人に會見に行つた所夫の武彦は、再び派な腕車に乗せられ、屈托顔をして歸つて來た、妻の亮子も幾分好奇心に驅られて、其の模様を聞くべく、先刻から戻りを待兼て居たのである。

階下の座敷にとつかと坐し、床柱に脊を靠たせて、庭の廂越しに蒼空を仰ぎ、武彦が黙つて居るに、亮子は少し氣懸りにもなつて。

「今乗つて被來になつたのも、先刻迎ひに來た腕車と同じですか、自用车などを置いて居る家なのですか。」

「ウン……」

所夫が未だ何か思案に耽つてゐるので、亮子は暫く差控へてゐたが、遂に又辛抱を

破つて、

「一體怎麼いふ身分の人なのです。」

「身分か、お前が聞いたら喫驚するだらう、イヤお前よりは、静枝さんが聞いたら猶喫驚する——」

「静枝さんが喫驚するつて？」

思慮深く小首を傾けるのであつた、武彦は話に漸く氣乗がして來たらしく。

「静枝さんは未だ學校から歸らんか。」

「未だです。然し静枝さんが喫驚するつて何んでませう——」

「鳥渡想像には及ばん、吾輩さへ餘り意外に驚いたのだから——。何うも世の中は廣いやうで狭いものだ、寧ろ小説的だ。」

「マア何ういふ事なのです。」

「お前、二十萬圓を學校や慈善團體へ寄附した事から、静枝さんが話したことを覺

えてゐるだらう。』

『エ、覚えてをりますとも、彼の高島純藏とか云ふ惨酷な高利貸の事でせう。』
『今日吾輩の招かれて行つたのが、其の高島の家なんだ。』

『マア……』流石に死子も眼を睜つて『それで、此の間内から来た社会主義の人も高島の何かなんですか。』

『何か處ではない、高島純藏の倅で、三百餘萬圓の相續人だ。』

『本統に意外です事。それにしても高利貸の子に、何うして那麽人が出来たのでせう、然し妾も最初から變だと思つてをりました。二度其自分の名を隠して云はないんですもの、必ず仔細のあることだと思つてゐました。静枝さんのことを知つてをつたのですか。』

『イヤ爾ういふ理由で名をいはなかつたのではないので、父とは全く反対な性質から、約り高島純藏の倅といふことを、幼少の時から隠すやうな習慣がついて居ると本

人自身も語つてゐた。静枝さんのことを話したら、顔色を變へて驚いたが。徒らに子孫のために金を遺さうとして、其の手段を擇ばなかつたものは、却て子孫を困めるやういふものだ。今日吾輩も熱々感した。』

『不思議な事もあるもので御座いますのねえ、全く小説的です事！。それで猶且事業のはうは、誠心に行らうと云ふので御座いますか。』

『無論大熱心で、財産の全部を社会的事業に費してもよいといふ意氣込みなのだ。渠が斯く熱心な国家社会主義者になつたのも、父の生前單に父の不名譽を償ふだけの考へから、貧民学校の設立を勧めたことがあるさうで、其の研究から遂に社会主義者になつて了つたのだといふが、貧乏から来た社会主義者でないだけ、總てが實際的で隠當だ。』

『それで貴郎は共同經營で、愈事業に着手なさるお意りですか。』
『そりや最う設計書も出来て、新川邊に地所を買収し、早速工事にも掛るといふの

だが、茲に困難な静枝さんとの関係だ、今の主人の格太郎と云ふのは、餘程静枝さんの人格に敬慕して居る、寧ろ敬慕の度を越して、戀着と云ふ傾向もある。父との關係を知らなかつた時は、實際妻にもしたいと云ふ考へであつたと告白して居る。然し今はそんな料簡は捨て、是非共今迄通り有力なる同盟者の一人となつて、社會的事業に盡して貰ひたいと云ふのだ、舊怨を忘れて貰ふためには、自分の名譽や財産を捧げてまでも、謝罪すると云つて居るのだが、お前は静枝さんが、何うしたら感情を融和すると思ふね』

『サア……』

亮子にも此の返事は能きなかつたのである。

(五十四)

草も木も生氣に満ちて、花も盛を競ふべき、名を春日野と呼びながら、凋落せる人

世の餘波を、赤煉瓦の火葬場や、累々たる卵塔に殘す、神戸市の共同墓地が、布引から東へ十餘町、摩耶山道の麓にある。

『高島純藏之墓』と刻みつけた、花崗石の大墓標を据ゑ、四坪の廣さに、二尺程土を盛上げて、石崖を疊み、階段を設け、周圍の柵もまた新しい中に、格太郎は兀然と立つて、感慨深く碑面の文字を打目成つて居る。

顔の色も常よりは蒼い、眼には異なる光りがあつて、をりく太い息が洩れる。これは昨夜武彦から静枝の消息を聞いて、強い煩悶を初めたからである。

武彦は亮子と共に、さきく静枝を説いたのであるが、高島家に對する悪感情は、何うしても融けぬのみか、更に一つの困難をさへ生じたのである。夫婦が格太郎と共に同経営で事業をやるについては、静枝は全く局外に立つといふ、夫婦は亦静枝を局外者にして、格太郎と共に事業を経営する事は、從來の關係上よりしても、又人間の情誼としても出来ぬと云ふので、此の解決のつくまで、一時事業の着手を中止すると

云ふのであつた。

格太郎は昨夜から煩悶を續け、今朝フラフラと家を出で、知らず／＼墓地に来て、父の墓標、對すると、無限の悲しみと痛恨の情、が又新しく漲るのであつた。

一代に三百餘萬圓の富を蓄積した人も、今は只一基の墓の主人である、現世を離れたものに、貧富もなければ榮辱もない、況して怨恨も復讐もあるべきでない。父に苦しめられた静枝の両親も、既に此の世を去つたといへば、同じ幽冥の人となつて、互に安らかな眠りを貪つて居るのであらうに、其の子同士に怨恨が残つて、静枝は自分を敵視して居る。自分が静枝を敬慕する心も、静枝が自分を敵視する心も、墓の中の人とならぬ内は、消散することが能きぬのであらうか、と思ふと眼が眩むやうになつたので、急に仰いで空を見た。

蒼い空に白い雲が、千切れ／＼になつて動いてゐる。山は緑色の衣に、多くの髪を取つて、疎に生えた松が浮模様のやうに見え、廣げた裳に雑木林や竹藪を刺繍のやう

に顯し、墓場には六七本よりない松の老木が、六甲山のはうへ寄るほど濃密と繁り合ひ、その邊りから先は稍斜面になつた、茫茫として際限のないやうな草原に、遠く小禽の聲がする。静枝が身にしみぐと浸込んで、夢のやうに茫乎となつた時に、これも亦夢ではないか？

向ふの墓石の蔭に、チラリと見えた東髪姿は、確に松木静枝である。格太郎は又眼が眩むやうになつた。

静枝の母は静枝が未だ神戸にゐる時——父が松木家の財産を押収した時——病死をしたと聞いてゐる。今静枝の展してゐる墓が、若しその母の墓ではあるまいか、と遠に氣がつくと恐怖の念が萌して、兩の手先がビリ／＼と顫へた。恰度其の時に亦、氣味の悪い程大い黒い蝶が一匹、フワ／＼と舞ひ上つて、静枝の頭の上を飛廻るのが眼につく。

顔を合せたくないやうな氣もする、逢うて十分意志を語りたい氣もする。躊躇し、

逡巡し、疑俱し、遂に猛然として父の墓前を去つたのである。
墓と墓の間を通り、足音を偷んで静枝に近づいたが、静枝は更に心着かぬ體で、心に小さい石の墓標に額いてゐる、墓石に彫つてある文字を覗くと、
釋鏡 貞信女。

(五十五)

墓の戒名を見ると、又悸つとして一足退いた。其の物音に静枝は見附る。二人の眼と眼は此の時に合つたのである。

衝と立上つた静枝は、急に顔色が變つて、下を向いた儘黙つて立去らうとする。
「松木さん……」。

格太郎は息苦しく呼んで、墓と墓の間を摺脱け前途に出た、路が狭いから、静枝は己じを得ず立留つて、而して俯向いて猶且黙つてゐる。

格太郎は聲を頼はして。

「小生は貴嬢にお逢ひするのを心苦しく思ひます、又貴嬢も小生に逢ふことをお好みにならんとは能く承知をして居りますが、然し是非一度は、直接貴嬢にお話しをして置きたいと、御迷惑と知りつゝお呼留め申したのです、暫時お待ちが願へませうですか」。

「ハイ、實は急いで歸らねばなりませんのですが……」。

「それは恐縮です。然し決してお手間は取らせません」と言ひながら眼を小さい墓石に反らせ、「失敬なことお訊ねしますが、このお墓は、若しや貴嬢の……」。
静は額越しに、瞥りと格太郎を見た、その眼に鋭い光りがあつて、格太郎の胸を貫いたのである。

「母で御座いますー」。

といった聲は曇つて、激した感情は、帯の邊りに重ねた手先の動くのでも解る。

格太郎は唸くやうにいつた。

「ア、實に濟まんです。小生の家から貴嬢の家に與へた苦痛の程度は、寺岡君から聞いて、小生は能く承知をしてをります。然し静枝さん、人に懺悔といふものがあります、神も懺悔は容れてくれます、小生の父も貴嬢の御両親と同じやうに、今は此世にをりませんが、若し存命でをつて貴嬢のお目に懸り、又貴嬢の一家の事柄を聞いたら、或は懺悔をするだらうと思ひますから、今日は小生が代つて懺悔をします。理のみに走つて情を解さず、貴嬢方を窮境に陥れた、不徳の罪を飽造謝します。』

「高島さん——」と云つて静枝は佯と顔を上げ、「それを只今妾が承りましたも、何んの益にもならぬ事で御座います。貴郎のお父さまから苦しみを受けました父と母は、最う此の世にをりませんのです——。殊に貴郎のお父さまも、此の世を去つてお了ひのですから、只今の貴郎のお言葉を、貴郎のお父さまの懺悔と聞くことは、道理に於て出来ません。又貴郎は余々御存じのない事ですから、貴郎からお詫を受け

る理由も御座いません。』

「ナル程。それでは貴嬢は何うあつても、此の感情を去ることは能きぬと仰有るのですね。』

十分に力を籠めていつた。

「ハイ、いろ／＼寺岡さん御夫婦からのお話しも御座いましたが、此の感情を去ることが出来ぬと申しますのは、妾は幼少の時御座いましたから、實は一家の破滅について無感覺で御座いましたので、約り深い怨みを含んでをつたのは、父と母だけで御座います。其の父と母が怨みを去らずに死にましたものを、勝手に妾が感情を去るといふことは、亡い父母に對して不孝になります。』

格太郎は熱した息を吐いて。

「爾うすると松木家から高島家に受ける怨恨は、永遠に消滅の時はないことになり

「マア、左様になります。」「幾らか静枝も氣の毒さうにいつた。

『無論而うしますと、小生と寺岡さんと經營に掛つた事業にも……』

『ハイ斷然 妾は無關係で御座います』と決然いつて『只今も申上げました通り、

今日 妾は急いでをりますから、是れで御免を蒙ります。』

鳥渡頭を下げて、格太郎の立つたとは反對のはうの路を、急足で立去るのであつ

た。

格太郎には最う引留る勇氣がない。痛憤の色を満面に現して、静枝の後姿を見送つ

て居ると、其の姿が父の墓の蔭に隠れた時、又一匹眞ツ黒な蝶が、父の墓の邊から舞

ひ立つたのである。

依然自分の近所を飛廻つて居た、先刻見た黒蝶は、向ふの蝶を目がけて翻々と飛ん

で行き、頓て二匹一所になつて、或は接き或は離れ、輪を畫き、線を引き、高く、低

く、狂つてゐたが、忽ち二匹一塊になつて、スーツと地に墜ち見えなくなつた。

（五十六）

春日野墓地から歸つて、格太郎は病摩の人となつた。一時は四十度からの體熱を發

し、徹夜頭を氷で冷す間に、いろいろ嘔言をいつたのである。醫師は重いインフルエ

ンザだから、格別心配はないと云つたが、母は随分心を痛めたらしかつた。翌朝から

熱が下降つて、氣も確になつたが、未だ頭が疼むといふので、氷嚢を除らずにゐる。

然し追々食慾もついて、牛乳に鶏卵にスープ、少量の葡萄酒も用ひるやうになつたの

で、漸く安堵の色が母親に見えた。

『氷が融けたやうだから取替へやうかね』

『爾うですね、最う餘り疼まんやうですから薬時止めてみませう』

『悪くはないかへ？』

「ナニ大夫丈でせう。餘り冷めたいので却て疼いやうになります。それに少し障子を開けて下さい。今日は蒸々暑いので、締切つてあると心持が悪いです。」

母は何事にも逆らばぬ氣質である。枕元近くの障子を一枚開ける。

「風がないやうですから、最う一枚開けて下さいませんか。」

「病氣に障ると、又難儀をしますよ。折角癒つて來たのだから。」

「慥かです。却て庭の景色でも見るほうが氣晴しになります。」

母が又一枚障子を開ける内に、格太郎は雪のやうな上敷をした蒲團の上に起直り、

さも勞れたやうに首を落して、廣い庭園を眺めながら。

「最う夏になつたのですね。若葉の色が中々美しい。」

「池の周圍に躑躅も咲いてゐます」といつて急に母は心づいたらしく「昨日お前の大層悪かつた時に、何んとか仰有つたつけね、爾うく、寺岡さん、彼の左の腕を戦争で失したといふお方ね、彼の方が被來になつたのだよ。」

「オ、寺岡君が來ましたのですか。小生も逢ひたかつた。何故取次で下さらなかつたのです。」

「中々取次ぐ所ぢやない、お前は夢中で居たのだから、お目に懸つたつて解らなかつたらう。」

「そんなに甚かつたのですか。」

「大層囁言をお云ひだつたが、お前少も覺えないかへ。」

「囁言を……少も知りません、什麼ことを言ひました。」

「いろくの事をお言ひだつたよ、朝江の事だのお父さまの事だの、それに静枝さんといふ事を幾度もお言ひだつたが——。静枝さんつて、何處のお人？」

格太郎の青い顔色が、急に赤味を帯びて。

「そんな事をいひましたか。」暫く默然と考へ「阿母さん、貴女十年程前に、阿父さんが、家屋や地所を抵當に貸金をして、今では其の地所も家屋も自宅の所有になつて

居る、花隈町の松木といふのを覚えて被在で御座いますか。

「爾うだねへ、爾ういふお方も来た事があるやうだが、能くは覚えて居ませんよ。世の中は廣いやうで狭いものです、静枝といふ人は、その松木の娘でして、阿父さんが家屋や地所を此方へ奪つた所から、それが原因で母親は病死をして、今もその母親の墓が、春日野墓地の阿父さんのお墓の近くにあるのです、又父親や阿兄さんといふのは、それから東京へ移つて、大層難儀をしたさうで、其の父兄も近年病死をしたさうですが、自宅は餘程深い怨恨を受けてゐるのです。」

「マア怨恨を——。爾うしてその静枝さんといふ人は今何處に居るのだね。」

「それが不思議です。今では此の神戸へ来て、金星女学校の教員をして居るのです、殆ど獨力で女子大學まで卒業したといふ、中々感心なものです。彼の寺岡の細君とは、同じ學校出たものですから、その縁で寺岡の所に寄宿をしてゐるのです。」

「お前、お逢ひになつたのかへ。」

「ハア……。」

堪へがたい苦悶が又起つて来る。

(五十七)

疼さうに手を額へやつたので、母は心配して顔を覗き。

「お前、又悪くなつたのぢやないか。」

「イエ」と格太郎は首を振つて「阿父さまは随分罪を造つたものですね。小生は今度計畫した事業に就て、是非共その静枝といふ人が必要でもあり、亦人物としても、今の女流には鳥渡得難いので、昔の感情を忘れて、我々の事業に助力して貰ふやう、寺岡夫婦からも説き、又小生からも頼んだのですが、何うしても承知をしてくれなかつたのです。これは決して静枝といふ人ばかりではなく、世間には未だ幾人も、此の高島の家で怨恨を含んでゐるものがあるでせう。」

二百十八
『困つたものだね。何うかしてその怨恨の無くなるやうにならないものだらうか……』

母も流石に思ひ當ることのあるかして、眉を蹙め愁然となる。

『それを小生も思ふものですから、畢竟今度の事業も計畫したやうな解なのですから然し一朝一夕では、逆も阿父さまに對する、世間の惡聲を消すことは出来ません。これにつけても妹が、小生と同じやうな料簡であつてくれると、大に都合が宜いのですが』と、思はず嘆息したが『……時に阿母さん、小生は改めて、妹と仲小路の結婚を許さうと思ひます』

『エ？』

母は意外に驚いたのである。

『お前那麼に不承知をお言ひのを……』

『エ、今でも不承知は不承知のです、が、然し小生は或る動機から、小生が妹

に對して取つた處置の、慘酷であつたのを感じました。小生は仲小路が、信用されぬ人物であるから、妹が將來の身の爲を思つて、結婚に不承知を唱へたのですが、戀は普通から見た、人世の理窟とは全く別問題です。妹が自分の愛するものゝために、生涯の幸福をも犠牲にしやうとする、それが今になつて、小生は無理でないやうに思はれて來ました、それで小生は此の結婚を許し、譬へば仲小路のために、慾の餌食にされるにもせよ、相當妹の身につく財産も分けてやつて、公然結婚を承認してやらうと思ふのです、幸ひ仲小路が、一生妹を愛し、満足に社會に立つやうになれば、即ち妹の幸福です、若し亦財産を奪つて、妹を虐待するやうになりましたら、其の時初めて妹も迷夢を覺して、堅實な精神に戻り、小生の相談相手となるやうになりませう。事實現在の有様では、全く蛇の生殺しですから、却て妹の爲にやらうな結果を生ずるかも知れません。此の事については小生の偏屈な考へから、貴女にもいろ／＼御心配を懸けましたが、此の病氣の癒り次第出京して、萬事の處置をつ

けますから、何うか御安心遊ばして下さい。』

戀に傷れた心の疼みを、妹の心に引き較べて、斯う言ひ出したのであるが、母は格太郎の口から、此の言葉を聞くのは餘程意外であつたから、寧ろ怪しんで膝を進む。

『それでは全く、お前承知をしておやりと云ふのだね。』

『エ、確です。』

『マア爾うしておくれたと、妾什麼にか安心が出来ると、お前に言つて亦怒られると可けないと思つて黙つて居たのだが、朝江が東京で何うしてゐるか、又突詰た心から、若し不料簡な事でもしはせまいかと、寝ても眠られない程氣を揉んで居たのです。お前の今の話しを朝江に聞かせてやつたらマア什麼に欣ぶだらう……』

母の眼には嬉し涙が溢れるやうになつてゐる。

襖が開いて、小間使の美代が行儀正しく両手を突き。

『アノ寺岡様と仰有るお方が、旦那様の御病氣をお見舞に被來いたしました。』

(五十八)

武彦は小間使に案内されて来る。母は朝江の事から、嬉しさが胸に満てゐるので、いそぐと座敷へ請じ。

『これは好うこそ被來やいました。』

『先夜は失禮——』と軽く會釋をしながら格太郎を見て、『ホー、起きてをられるやうでは大分宜しいですな。』

『ハイ、お蔭様で——。』

格太郎は懐しさうに。

『寺岡さん、斯んな場所です。甚だ失禮します。又前夜被來下さつたさうですが、小生少しも知らんものでしたから——。』

『イヤ何うしまして、アノ時大層悪かつたやうですから、吾輩非常に心配して、實

は今日見舞に來たのですが、マア佳いはうで結構でした。それで早速ですが、吾輩は今日貴郎に、或る福音を齎して來たです。』

『福音?』

『約りいふと今度の貴郎の病氣が、大なる價值あるものになつたのです。』

『小生の病氣が價值あるものになつた?、不思議な事ですな。』

『貴郎、一昨日春日野墓地で、静枝さんにお逢ひでしたらう。』

『ハア逢ひました』と云つて、恥たやうに俯向いて了ふ。

『吾輩其の事を静枝さんから聞いたですが、静枝さんは自分との關係上、今度の事業を成立させる事が出来ぬやうでは、我々夫婦に對して濟まぬといふ處から、自分此の際神戸を去つて、東京へ歸る決心をし、既に學校のはうも辭職の手續を濟ませ阿母さんの墓へも、別れを告げながら參詣に行つたといふ次第であつたのです。吾輩も實は其の決斷の早いのに一驚を喫して、兎も角いろく勧めて置き、一應其の始末

を貴郎に告げやうと思つて來ると、貴郎は意外にも病氣に罹つてゐる。吾輩も殆ど處置に盡きて、茫然歸宅をしようと、荆妻が静江さんを説いてゐる處であつたから、恰度幸ひ吾輩も口を添へて、貴郎が病氣にまでなつたと云ふことを話した——貴郎の病氣が何も静枝さんに關係のある解でもないでせうが——ツイ爾ういふ風にいつて了つた處が、其の病氣と云ふことが餘程感動を興へたらしく、今一應考へさせて呉れといふので、其の晩はそれで終つた處、昨夜改めて静枝さんのいふには、今迄自分は高島家へ對して、積年口惜いと思つてをつた一心から、毫も他の事を顧みなかつたが、當代の格太郎さんに對しては、素より怨恨を挾さむべき理由はない、自分が我意を張るために社會に有益な事業の、進捗を妨げては濟まぬから、東京に居る阿兄さへ不承知を唱へなかつたら、我々と共に提携して、事業に盡しませうと云ふことになり。早速手紙で照會するといつたのを、手紙では十分前後の事情を盡すことが出来ないから、寧ろ吾輩が東京へ行つて、直接阿兄さんに面會の上、一伍一什を語つて諾否を聴く、恁

ういふことになつたのです。何んと妙な結果になつたでせう。』

格太郎は忽ち病苦も拭ひ去られたやうになつて、抑へかねた歡喜の色が、面から溢れるやうに見えた。

『何うも夢のやうです、小生は嘗て今日程に、満足を覺えたことはありません……。殊に貴郎が態々東京へ行つて下さるつて、只々恐縮の外はありません。實は小生も急に東京へ行きたい用向もあるのですから、斯んな身體でないと御一緒に行くのが、萬事に都合が好いのですが——。爾うして何つ東京へ行かれますか。』

『早いほうが宜しいから、今夜でも出發しやうと思ふです。』

『今夜』といつて母を見ると、母も自分の顔を見る、言はずと意味は讀めるのであつた。『阿母さん什麼でせう、朝江の事を寺岡さんにお頼みしては——。』

『爾う願へると結構だね。此方も一刻も早いほうが宜いのですから。』

武彦は母子の容子を察して。

『何か東京に御用でもおありのなら、御遠慮なく仰有つて下さい。』

『有難うと』格太郎はいつて、鳥渡言ひ渡んだが『一家の私事に涉ること、御依頼するもチト面目ないので、實は小生の妹が、先頃から東京へ參つてをるので。』

『オ、妹さんが——』

『只今詳しい事情をお話し致しますが、其の一身上に就いて、急に處置をつけて遣りたい事があるので御座います。』

(五十九)

蜘蛛の巢のやうに敷かれた電車の線路は、市中の繁華を場末へ運んで、東京を圍んでゐた田や畑地が、いつとはなし新しい町家と變るのである。

昔は甲州街道の第一驛、今は市内電車の終點、内藤新宿から甲武鐵道の線路を過つ

て、淀橋町も柏木附近になると、新建の貸家の間に、秋は稻掛に竿を結びつけた、榛の木林も残つてゐれば、又現に耕されてゐる菜圃もある。牛肉の切賣店、青物屋酒屋、西洋菓子屋、新開の町に相應しい小商人の並んだ家積を細小路に入ると、貸家ながら一棟宛に分れて、平屋建の同じやうな家屋がある。其の一軒の門口に、阪口昌雄と印刷した名刺を貼りつけ、二疊の立關を上ると、襖を隔つて奥が四疊半の茶の間、左に三疊の小座敷と、右の六疊は廻り縁になつて。粗末ながら庭らしく樹木も植てある。昨日も降り今日も降る、卯の花下しの雨を、縁近く坐つて、物思はしげに仰いでゐるのは朝江である。活々とした顔の色澤も愁ひの雲に鎖されて、清しかつた眼さへも曇りを帯びてゐる。傍にはお浪が屈託の顔を、垢浸た袴の襟に埋め、これにも日頃の勝氣は見えぬ。茶の間からは初子の、口から出任せの唱歌が聞こえる。主人の昌雄は不在らしい。

「それでお嬢様、只今申上げたやうな事情で御座いますから、貴嬢の御決心も能く

伺つて置きたいので御座います。』
 「決心と云ふと、約り妾の身の處置なのだね。』
 「マア爾うなので御座います。今日は所夫も是非共仲小路さんに逢つて、貴嬢の事も自分の事も、十分確めて來るといつて出て參つたので御座いますから、何んとか模様も解るだらうと思ひますが、何うも近頃仲小路さんの様子が、妾は變に思はれてならないので御座います。豈夫彼のお方が甚麼ことはあるまいと思ふのですが、萬一心がお變りになつたのではあるまいかと、爾ういふ心配も起りますので……。』
 朝江は黙つて俯向いて居る。
 「近頃は少しも此處へ被來にならず、又所夫が幾度尋ねて參つても逢へないので御座いませう。それに貴嬢のお手紙にさへ、返事が無いといふのですから、餘程不思議でなりません。何つぞや箱根の温泉へ行くと、貴嬢を誘引に被來つた時、二人限りでは厭だと仰有つて、貴嬢がお断りになりましたが、那箇から憤つて被在しやるのでは

ありますまいか——』。

『甚麽ことから憤つて被來にならないやうでは、仲小路さんも餘ッ程解らないお方だね』。

朝川が凜とした調子で言つたのを、お浪は不満らしく聽いて。

『それが貴嬢、何つちも申す頑固といふので御座います。何うせお嫁に被往しやる身ですから、御一緒に被往になつても宜いでは御座いませんか』。

『それが妾は嫌ひだから最初から仲小路さんに能く申上げてあるのだよ』。

『マアそれはそれとしました處で、貴嬢のはうは江藤さんから、阿兄様のはうへお掛合になりましたが、猶且結婚の御承諾はなく、貴嬢の御勝手といふ事になつたのださうで御座いますから、御婚禮をなさらうとなさるまいと今は貴嬢のお心一つで御座いますが、只困りますのは妾共の身の上で御座います。東京へ來さへすれば、直ぐ何處へでも就職されるやうにしてやるといふ最初仲小路さんのお約束で御座いましたの

が、最う一月の餘になりますのに、何處へお世話をして下さるのでもなし、若し就職先のなかつた時は、相當の給料を拂つて邸の事務を執せるといつたお話しも、今では何處かへ飛んで行つて了つて、斯うして大勢口を揃へて居ることですから、段々貯へも盡き、貴嬢からお金を拜借して、その日の生計を立てるといふ始末、此の儘最う一月も送りましたら、それこそ家内中餓死をせなければなりません』。

(六十)

お浪の言葉には愚痴もあれば諷刺もある、朝江はやゝ憤として。

『それではお前達の難儀をするのも、猶且妾からだとお言ひのかへ』。

『イエ爾ういふ譯ではないので御座いますが、只今も申しましたやうな事情で御座いますから、何んとか早く處置がつかせないと、お互様にますます難儀をせなければなりませんので、それで御相談をするので御座いますが、今日所夫が歸りまして、猶

且仲小路さんに逢へぬといふやうな事でしたら、此の先什麼したもので御座いませう
最う今月だつて幾日もありませんから、又お金の心配だつて致さねばなりません』。

『お金なら未だ妾の所に少しはあるよ』。

『それはお所持でも御座いませうが、貴嬢にしても何日迄も、斯うして被在つては
先の見込みがつきませんから、何んとか被爲なければなりません。マア私共のはう
は、いよ／＼仲小路さんのはうが可けなければ不可ませんやうに、何んとか身の振方
もつけますが……』。

『身の振方つて何うするの……？』。

『何うと申して差詰よい考へもありませんが』と心細さうに言つて『何なりとして
生活るだけの事はせなければなりません。それにつきましましては高い月給で出るといふ
やうなことは中々能きまいと思ひますから、逆も貴嬢のお世話までは届くまいと思ひ
ます。就きましては貴嬢にも、身の振方をつけて頂かなければなりませんまいと思ひま

して……』。

お浪に言はるゝまでもなく、此の問題に就ては、朝江は此の程から煩悶を重ねてゐ
たのである。東京へ来た當座こそ、仲小路は足繁く訪ねて来て、いろ／＼親切なこと
もいひ、又孤獨に近い境界を慰めてくれたが、いよ／＼兄から結婚を承諾せぬと云
ふ、最後の通知があつてから、只の一回も姿を見せず、又逢うて相談をしやうと、此
方から手紙を出しても返事さへ遣さぬ。打つて交つた冷淡な所爲は、殊更に突放して
此方から纏るやうにさせ、自分を愛の奴隷にする心か。但しは亦兄が云つたやうに最
初から自分に對する愛情はなく、自分の身につく財産を得やうとして、欺いて深處へ
入れたを、其の目的の外れたため、歸れがしに仕向くるのか。就れにしても面白から
ぬは今の仲小路の態度である。神戸へ戻らうか、兄や母に合はす顔がない。仲小路に
纏らうか、侮辱の前に屈伏するやうなものである。進むことも退くことも能きぬを、今
亦お浪から身の振方をつけよといはれて、只何んもなく無念の涙は、泉のやうに湧き上

るのであつた。

「身の振方をつけろとお言ひだつて、妾の事情はお前だつて克く知つて被在ぢやないか。今更神戸へも歸れず、又意地としても仲小路さんのはうへ泣きつけもしないから、妾は什麼なりと勝手にするから、お前達のはうはお前達のはうで、勝手に身の振方をつけたら宜いではないか。妾は決してお前達の、お世話にならうとは言はないから……。」

「イエ私には、何もお嬢様のお世話をするのが厭で、只今のやうに申したのでは御座いません。約りお世話が出来ますまいと思ふのと、一つは貴嬢のお身の上も案じますからです、意地と仰有つても斯ういふ場合になつたものですから、猶且仲小路さんにお頼みになつたはうが、萬事御都合が好いと思ひますが。」

「妾は仲小路さんに頼むなんて、甚麽ことは何うしても出来ませんが、然し逢つて一度言ふだけの事は是非言ひたいと思ふのだが、此の節では邸にも居ず、又行先も知れないと云ふのだから……。妾残念でならない……。」

耐へかねて疊に俯伏したのを、お浪は寧ろ腹立たしげに見やつたのであつた。

(六十一)

小降になつた雨の中を、主人の昌雄は力なく歸つて来た。

「マア貴郎何んです、その裾の泥は——。」

お浪は早くも叱言を浴せかける。昌雄は衣服の汚れたのを見るでもなく。

「電車から此方の路の泥濘い事は非常だ、何うして東京は斯うだらう、幾ら氣をつけても芻が上る。」

「ア、其の儘坐つては可けません、此方のお着替なさいな。何うして這處に氣不性な人だらう、裾を端折つて歩けばよいことを。」

「今日は諸方廻つて来て草臥た、中々それ所ではない。」

衣服を着替へ、さも落膽したやうに茶の間に坐る。朝江は六疊の間に引籠つて居る。

「諸方つて、何處を那樣に歩いたのです。仲小路さんに逢へましたか。」

「又逢へなかつた」溜息を吐く。

「又……」と蔑むやうに云つて、一體貴郎毎日々何をしてくるのです、仲小路さんが外國にでも行つて被在やるのぢやあるまいし、逢へぬといつて無駄足ばかりして歸るといふことがありますか。先方は華族で暢氣にして居られませうが、此方はそんなことをして居ては、口が乾上つて了ひます。」

「お浪」と昌雄も常になく氣色ばんで「お前は歸るとガミくいふが、全體斯な口の乾上るやうなものには誰がしたのだ。貴様が仲小路さんと相談をして、是非共東京へ行く、東京へ行かぬのなら離縁を貰ふとまでいつて、到々俺を引張り出し、斯んな難儀を見るやうにさせたのではないか。アア實に神戸の御主人に濟まぬことをした。長年お世話になつた、其の御恩を仇で返しお嬢さままでも咬かして来て、同じやうに難

儀をおらせ申す、これも猶且罰かも知れない。」

「何んですと貴郎、お嬢様を咬かして来たなぞと、那樣外聞の悪いことをいつて下さいますな。ナル程妾は仲小路さんの、お傳言は取次ましたが、私から東京へ被來やいとはお勧め申しません、お嬢様は仲小路さんと、御勝手に御相談遊ばした事です。又斯うして難儀をしますも、元はといへばお嬢様と仲小路さんの間が、面白く參らなからで——仲小路さんは瘦ても枯ても華族さんです——豈夫私達を欺して、難儀をおらせなさるやうな事はありません、約り貴郎が氣が利かないからですよ。這處にならない内に、早く仲小路さんに急ついで、極める事を極めて了へば可かつたのを、グズくして居たからです。」

「幾ら此方が極めたいと思つても、先方に極める意のないものが、何うして極まるものか。實に馬鹿な目に逢つた」と、寧ろ自分を嘲るやうにいつて、「お浪、お前は仲小路を、華族だと云つて大層信用して居るが、大間違だぞ。」

「華族でない」と云ふのですか。」

「華族は華族だが驚いた華族だ。お父さんの時代から銅山などに掛つて、借金も相當にあつたのを、同じ華族の親類が寄つて其の時は漸く整理がついたが、今の仲小路になつてから盛に放蕩をやつて、又澤山に借金を造らへ、赤坂の本邸と云ふのも他へ抵當に入つて居る。京都に在る別邸といふのも、夙うから他人の所有になつて居るのださうで、今迄私達にいつてをつた事は嘘だ。それも邸へ行く度に、金貸らしい男が催促に来て居るから、餘り不審に思つて今日いろく訊いて解つたのだが。聞けば聞く程驚かすには居られない。家扶だと云つて我々に應接をして居るのは、實は借金取の談判役に、三百代言を抱へてあるので、家とは一切其の男に任せてあるから、非常に亂脈になつてゐるといふ。今では親戚からも義絶され、加之に仲小路といふと大體な高利貸は相手にしない位だから、多分は追ツつけ華族の禮遇も停止されるだらうといつて居た。ア、飛んだ奴に欺されて了つた。」

(六十二)

寧ろ信じ過る程に信じてゐた、仲小路の内幕を聞いて、お浪は驚きもし亦自分の輕擧を悔みもしたが、長い習慣は理を非に曲げて、所夫を屈伏させやうと云ふのが、殆ど此の婦人の天性になつてゐる。

「仲小路さんが那樣人であることを、貴郎だつて今日初めて知つたのでせう、それを今になつて妻ばかり悪いものにして。自分の働きのないことは棚にあげて……。」

「何んだと、モウ一度云つてみる、假にも亭主に向つて、その言葉は何んだ。」

「只さへ此の頃は氣のイラ／＼として居る所もある、穩かな昌雄も火のやうになつた。」

お浪は少しも怯まない。

「爾うちやありませんか、働きのないと云つたのが悪いのですか。お前さんに連添つてから、最う二十年の餘になりますのに、今日迄一年でも樂をさせたことがあります。」

か、今度の事だつて、畢竟少しでも身分を上げ、氣樂に暮したいと思へばこそ、貴郎にも無理に勧めたので、欺したのは仲小路さんが悪いのです、妾は何も好きこのんで斯んな事にしたのではありません。貴郎さへ立派にやつて呉れれば、妾は餘計な心配はしないのです。』

氣嵩のやうでも婦女だけに情が迫つて泣聲になる。

『ウン、俺は生意地がない、未だお前に贅澤をさせた事はないが、お前も己も斯ういふ運命に生れついたのでから仕方がないのだ。それが氣に入らないのなら、何故今迄連添つて居た。厭なら今でも出て行くがよい。』

『出ろといふなら出て行きますから、出られるやうにして出して下さい。婦女だつてお前さんよりは立派にやつて見せます。』

『迂奴、飽迄亭主を馬鹿にする。』

堪忍袋を破つて、昌雄は立上るが早い、お浪の横顔に拳を加へた。

『オヤ貴郎殿つて——』

氣が狂つたやうになつて、昌雄へ武者振りついて來たが、苦もなく兩手を掴まれて了つたので、口惜さうに身を悶え。

『モットお殿ち、く〜』

『オ、殿つてやる。』

突如として起つた此の活劇に、臺所で水弄をして居た初子が、ワーツと泣いて駆け込んで來る。朝江も六疊の間から來て、漸く二人を引分けつゝ。

『お前達はマア喧嘩をするなんで、何んといふ事です。大きい聲を出してお隣へ聞えるぢやないか。』

『ハイ、お嬢様、斯んなことを御覽に入れて恐れ入りますが、餘りお浪が圖に乗りますから——』と息を切つていふ。

『圖に乗るつて何が圖に乗つた』とお浪は涙の眼に昌雄を睨む。

『未だいふか』と又立上らうとする袖に初子が縋りついて。
『お父さん、怖いよ。』

『泣くのぢやないよ、最う宜いから』と朝江は初子を抱寄せて『先刻からの話は、
妾彼方で聴いて居たが、約りお前達の身さへ就職がついたら、喧嘩なんぞしないでも
済むのだらう。』

『へエ、そればかりでもありませんので、常から私を踏付にした事ばかり申します
から——。然しお嬢様、貴嬢も飛んだ目にお逢ひになりました。お聞きの通りの始末
で御座いますから、逆も仲小路のほうは見込が御座いません。未だしも御縁組を遊ば
しませんでしたのを、お僥倖と申さねばなりませんので、若しお嫁にでも被往いまし
たら、今後何んなに難儀を遊ばしたかも知れないので御座いました。これと申すも皆
私共が悪かつたので、お詫の申上げやうも御座いません。』

『イエ最う那樣事は聞いたつて詮方がないから、是れから妾はお前達の身の振方だ

蝶 胡 黒

けでもつけるやうに、仲小路さんにさせやうと思ふ……。』

『私共よりはお嬢様、貴嬢何う遊ばす御考へで御座います。』

『妾は妾で考へて居ることもあるのだよ。兎も角仲小路さんには是非一度逢ひたいの
だが、猶且行先は解るまいか。』

『それを今日諸方聞合せて歩きまして、漸く昨日から大磯の濤龍館といふ處に、
行つてをることを突留て参りました。』

『大磯といふと東海道の、アノ海水浴のある所だね。』

『ハイ左様で御座いますが、惣じお逢ひにならんほうが宜いかも知れませんが、逢へ
ば却てお腹立を増すやうなもので御座いませう。』

『それでも妾は是非逢はなければならぬから、今日これから出掛けて来る。』

『これから——』と昌雄は呆れて『デモお天氣が悪う御座います。』

『ナニ雨はモツ歇んでゐる。』

蝶 胡 黒

朝江は六疊へ支度に立つた、お浪は座敷の眞中に泣伏して居る。

(六十三)

盛暑の頃は海水浴の人に、海も沸くやうな賑ひを見る、大磯の濱を鴨立澤のほうから、笑ひさゝめいて来る四人連の男女がある。

縞セルの單衣を着て、白縮緬の兵兒帯に金鎖を捲きつけ、バナマ帽を冠つて、彼の銀金具のステッキを引摺り、素足に旅館の貸下駄を穿いた、仲小路美智磨と並んで、雨霽の空から急にキラ／＼と照りつける初夏の強い日光を絹張の蝙蝠傘に防げ、お召の華美な袴に、同じく旅館の貸下駄を穿いた婀娜者は、其の衣服の着こなしや粹は配合せに、誰にでも藝妓といふことが解る、齡は二十一二に見ゆるが、其の實二十四五であらう。淡白と髪を銀杏返しに結つて、清しい張りのある眼に男を蕩からす力がある。後から来る二人は、丸鬘に結つた茶屋女らしいのと、友禪の華やかな扮装をした

十四五の雛妓である。

『ア、暑い、貴郎、暑くなくつて』

藝妓は鳥渡立留つて、白い絹手巾で頸元の汗を拭く。

『少しは暑いな』と仲小路は緩く笑ふ。

『マアお待なさいなね。加之に這塵砂の上を、鼻緒のゆるい下駄だから歩き難いつたらない』

『姉さん〜』突然雛妓が頓狂な聲を出して、『ア、彼處に山が見えますよ』

『何處に?』

四人の視線は西手の海へ、象の鼻のやうに斗出した、遙かの陸地に注がれた。

『彼りや伊豆の半島だ』と仲小路が説明を與へる。

『伊豆の番頭つて……』と、雛妓が眞面目な顔をして反問したので、三人が同時に噴出した。

『番頭ぢやない、半島だ。半島と云ふのは陸から海へ突出した所のことといふので番頭といふのは丁稚の昇進をしたのだ』

仲小路が笑ひながら講釋をする。丸鬚はクス／＼笑ひながら。

『歌留太ちゃんは、番頭と云ふ理由があるのですよ。日本橋の呉服屋の番頭さんに情夫があつて、衣服や何んぞ造へて貰つて居るのですもの』

『アラ嫌なお金姉さんだこと。ヘン那麼人——』

『オヤ爾う、そんな情夫があつたの、妾毫も知らなかつた』と藝妓も口を出す。仲小路は態と感心した振をして。

『ウン中々腕があるな』

『知りませんよ』

調戲はれると知りつゝ、藝妓は態とツンと澄まして見せ、ズン／＼先へ歩いて行く。『呉服屋の番頭つて眞實の事か』と仲小路が興がつて訊く。

『嘘ですよ。カラキシ未だ色氣なんぞありやしません』と藝妓が辯解する。

『可笑いのですよ』と丸鬚が又口を挟んで、『番頭さんといふのは年寄の兀チャンで、大層彼の妓を最良にするのですが、彼の妓は大嫌ひで名前をいつても厭がるのです』

『そりや爾うと、今の鴨立庵つて、充らない所ぢやありませんか、那麼所なら暑い思ひをして態々見に行くのぢやなかつた』と藝妓は不平らしくいふ。

『爾うねえ榮龍さん。妾も面白い所とは思ひませんわ。旦那何處が佳いのです』

『何處が佳いといはれては困るが、彼處は大磯の名所なのだ。世を捨し身にもものは知られけり鴨立澤の秋の夕暮、と西行法師の詠んだといふのが彼處で、其の舊跡へ庵を建つて、代々俳諧の宗匠が住んでゐる、風雅な所に價值があるのだ』

『風雅か何んか知りませんが、妾達は猶且歌舞伎座でも見に行つたはうが好いの、最も大磯も倦々しました。貴郎未だ此地に居るのですか、モウ好加減に切上げや

うぢやありませんか。ネエお金さん』。

『妾も賛成ですわ。モット熱くなつて賑かな時分だと、大磯も退屈しませんが、斯う淋しいと、旅館に居ても陰氣になります』。

『大磯より新橋のほうが可いとは、話せない奴等だ。然し折角来たものだから最う一晚泊つて歸らう』。

静に風いた海は、底干の潮に所々巖を露はし、女波追ふ男波の寄せては返す岸邊を傳つて、四人が瀧龍館へ歸つて來ると、玄關口へ今朝江を乗せて來た、腕車の梶棒が下りた所である。

(六十四)

顔と顔が合つたので逃げもならず、『オ、』と狼狽した聲でいつて、流石の仲小路も賑くなつた。

朝江は早くも三人の女達に眼をつけ、仲小路に對する、侮蔑の念と憤怒の情が、同時に胸中へこみ上げたのである。黙つて車夫に賃錢を渡し、又黙つて仲小路の顔を瞻詰た。感情が激して、速には言葉が出なかつたのであらう。

仲小路は漸く冷靜の態度に歸つて。

『貴嬢、今東京から來たのですか、何うして小生の此地に居ることが解りました』。

『今日、阪口が聞いて參りました』。

『阪口君、定めし小生に逢ひたがつてをつたせう。實は小生のはうが、いろく多用であつたものですからな。それで何んですか、貴嬢は小生に御用があつて、態々此の大磯まで來られたのですか』。

『左様で御座います』。

『ハア爾うですか』といつて、藝妓達のはうを氣にしつゝ、『然し何うせう、小生も今夜は東京へ歸らうと思ふのですが、お急ぎの用でなければ、東京のはうでお聞き』。

するやうにいたしたいものですな、小生が貴嬢のはうへ出掛ける事にします。』
『急ぎますことで、態々参つたので御座いますから、鳥渡でもお話しを願ひたいの
で御座います。』

『爾うですか。それではマア此方へお上んなさい。』

藝妓達は頻に朝江を見て、こそくと瞬いて居たが、今玄關を上らうとした仲小路
を、『モン』と丸番が呼留め、何か密々と囁くと、仲小路も又ひそくと瞬く。これ
を朝江は、見ぬやうにして見つゝ、仲小路が階子を二階へ登つて行くので、自分も階
子を登り、其の中段頃へ行つた時に、玄關口で藝妓達の、聲を合せて笑ふのが、何う
やら自分を嘲げるやうに聞かれた。

欄干を透かして青海原を見る、廣く二階の一室へ通ると、座敷の隅に婦女の衣服や
持物、又は仲小路の旅行鞆などが取散してある。二人は對坐したが、暫くは言葉がな
かつた。漸く朝江が口を切つて。

『御遊興のお邪魔をしまして、済みませんで御座います。』
皮肉に云はれて、我知らず仲小路は顔を俯向け。
『遊興といふ譯ではないのですが、實は或る事業上の關係から、他に附合つて、藝
妓なども一緒に来るやうになつたのです、附合つて来た男といふのは、今鳥渡他出
て居ますが……。』

朝江は冷やかに聽いて。

『それにしても御愉快で御座います。』

『イヤ一向愉快でもないですが……。オ、爾う云へば貴嬢から再三お手紙を頂戴し
てをつて、鳥渡お返事を上げなきやならんでしたが、書面のお返事よりは、自身で行
くはうが早いと思つてをる内、後からく用事が出来たものですから、ツイ延引にな
つて済さんことをしました。それで今日わざわざ被來になつたのも、猶且お手紙にあ
つた事なのです。』

『手紙のことも能く貴郎の思召を伺ひたう御座いますし、また阪口のことにつきましても、お話しを申し上げたいので御座います。』

(六十五)

隣の客間にゴソ／＼と人の氣合のするのは、何うやら藝妓共の交る／＼来て、立聽でもするかのやうに思はれる、仲小路は殊更威儀を造つて。

『貴嬢のお手紙に書いてあつたのは、結婚問題に就て、小生の意見を聞きたいといふのでしたね。然し朝江さん、そりや少し見當違ひぢやないですか。今日の場合、寧ろ小生のはうが貴嬢の意見を聞く位地になつて居るのです。最初小生は自由結婚でも敢て遂行すると云つた。然るに貴嬢は厭だといふので、小生は再び貴嬢の實家へ對して、江藤を以て交渉を開いたですが、依然として結婚の承諾がなく、約り貴嬢の自由意志に任せるといふことになつたのですから、貴嬢が任意結婚をする氣なら、其の事

を小生のはうへ申込まれたら宜いので、小生は小生で亦それに對するお返事をするといふのが順序です。』

『ア、左様で御座いますか。爾ういふもので御座いますか。妾は解釋を誤つてをりました。畢竟妾が東京へ來ましたのは、母や兄に承諾をさする手段で、若し承諾のなかつた時には、他に方法もあるからと、貴郎からいろ／＼お勸になつたものですから、其氣になつたので御座いますが、實家のはうの承諾がなかつたから、今度は妾の任意にせよと仰有るのは、チト冷淡なお言葉ではありませんか。』

『冷淡ですか……。然し考へて御覽なさい、這麼工合になつたのも、貴嬢が頑固過るからです。早く自由結婚でもやつて了へば、貴嬢の家のはうでも、大に感情が異つて、結婚を許したかも知れんのでした。』

『妾頑固で御座います。何うせ藝妓やなんぞのやうに、貞操を猥りにすることは能あません……。』

語氣に十分嘲りがあつたので、仲小路も小面憎く思つた。
『それで結局。貴嬢は什麼しやうと云ふのですか。小生と自由結婚を望むとでもいふのですか。』

怒氣は朝江の満面に漲つて、上眼に仲小路を睨むやうに瞻詰め。

『妾は詐りの多い人と、結婚することは望みません。』

『何んですと。』

仲小路も血色を變へた。朝江は息遣ひ激しく。

『貴郎は妾を欺いて居ました、貴郎が今日まで妾に仰有つて居たことは皆嘘です。良心に顧みて、疚ましい事はありませんか。』

『貴嬢は小生を侮辱めに來たのですか。』

『妾に侮辱める意志はありませんが、貴郎が爾う聞かねばならぬやうな位地にあるのです。人を弄んだ報いです。』

『歸つて下さい、貴嬢のやうな人と、お話しをする必要はない。』

『妾も是だけ申せば、最う妾の一身に就ては、お話しをする必要はないのです。』

然し貴郎の阪口に対する責任は、妾同様には参りますまい。阪口は貴郎の言葉を信じ、職を失つて今では親子三人が飢渴に迫つてをります。それを貴郎が見捨て、置くといふことは餘りに惨酷では御座いませんか、妾は今後貴郎に對しては、何の希望も有ちませんから、切て阪口だけは救つてやつて下さい。之は貴郎が盡さねばならぬ責任だと思ひます。』

『貴嬢の指揮は受けんです。三百餘萬圓と云ふ、大財産家のお嬢さんだ。貴郎が食へるやうに、世話をしてやられたら宜いでせう。』

『それでは阪口のはうも、貴郎は放任なさるお心ですか。』

『幾ら世話をしてやらうと思つても、抱人がなげりや已むを得んでせう』と空囁いて『餘り自惚が強いと、阪口でも貴嬢でも失策しますよ。世間には阪口より氣の利い

二百五十三

た人間や、また貴嬢より美しい婦人がゐます。お望みなら新橋第一の別嬪を、今此處で御覽に入れませうか』

『そんなもの見たくはありません』

『見るのが厭なら早くお歸んなさい』

『居ろと仰有つても、這麼穢はしい所にはをりません』

衝と朝江は立上つた。隣の座敷でクス／＼笑ふ婦女の聲がする。

怒りの血が脳に集つて、朝江は眼がグラ／＼としたのを、耐へて浮き足に座敷を出た。その顔は凄いと蒼くなつて居たのである。

（六十六）

夕陽に彩つた雲の峰も、濃紫に染めた島山影も、いつか夜の色に消されて、宵闇の沖に漁火を動かしつゝ、満ち来る汐の浪高く、巖に碎けて立つ水柱や、岸を打つて

砂を洗ふのが、仄に白く光つて見ゆる、その海濱に一叢濃い暗をつくつた、松の樹立の間から、チラ／＼と燈火を洩らす、松林館の庭續きを、海邊のうへ歩いて来る二人連の男がある。

貸浴衣の重着をして、片袖をブラリと垂らしたのは、彼の寺岡武彦である。今一人はネルの單衣に、縮緬の兵兒帯を締め、身長は武彦より低い、普通のものに較べては高いほうで、柔かい八字髻を蓄へ、年齢は三十を一ツ二ツ越した、頭髪を分け色白の、穏かさうな人品である』

『君と對酌したのも久し振だ。ア、大分酔つた』と武彦は満腹の酒氣を吹きつゝ、『神戸と異つて此の邊の海は、直接太平洋の波浪を受けるだけ、何んとなか豪壯で好いね』

『君は相變らず飲ける。然し戦争前から思ふと、餘程量が減つたやうだ』
『片腕失したので、何うしても吸込む面積が少くなつたのだらう。ハ、ハ、ハ、』

「ナル程それも爾うかな」。

二人は快よく笑つた。

サク／＼と庭下駄に濱砂を踏みながら、武彦は相手の顔を瞰下すやうに覗き。

「松木君、君は餘り虚弱のはうでもなかつたやうだが、海濱へ轉地療養に来るやうになつたのは、所謂醫師の不養生かね」。

「多少其の點もある、澤山飲めもしない酒を一時自棄氣味でグイ／＼飲つたから、多少胃や腦を悪くしてゐるが、然し轉地をする程のことでもないで、今度此地へ来たのは、實は不平病が手傳つて居るのさ」。

「不平病。不平つて怎麼不平かね」。

「君も知つての通り、僕は醫科大學を卒業して、是れでも醫學士だ。元來僕が醫科に入つたと云ふのは、御承知の如き一家の事情であつたから、早く實収入のあるものをと考へたので、醫師になるのが、一家を爲すに捷徑だと思つたのだが、然しいよい

よ醫學士の肩書を貰つた處で、これから樂をさせやうと思つた父は世を去つて了つたイヤ實際醫學士の肩書だけでは、父に樂をさせることが出来なかつたかも知れないが父がをらなくなつて見れば、急いで金取主義に走る必要もない、又君の所に御厄介になつて居る妹も、兎も角獨立生活が能きるやうになつたしするので、自分は何か我が醫學界に、貢獻するやうな事蹟を擧げたい、夫には獨逸へ行つて四五年も留學したい、と斯ういふ希望を有つたが素より洋行費はなしするので、研究の上についても洋行といふ事についても、便宜の多い所から、大學病院へ僅かの報酬に甘んじて助手に入り、専心に病理研究をやつて居るが、何處へ行つても情弊はあるものだね。殊に大學部面は學問もあつて、必ずしも實力のある者が、擢拔されるといふのでもない、現に○○君の如き、病理解剖では日本有数の人として、醫師仲間推奨されて居ながら數十年間助手の儘で繼續し、遂に助教授にさへ進められなかつた實例もある。又僕自身に就ても、既に洋行させられることに内定してをつたのを、或る者の運動の爲、俄

に變更された不平もあるので、何時まで辛抱して居ても充らんから、寧ろ方向を變へやうかと思つて、病氣を假託に此大磯へ来て、目下熱慮中と云ふ境界なのだ。

(六十七)

「君にして不平を起すといふのは、能々の事だらう」と、武彦は同情深くいつて、「吾輩爾とは知らなかつたものだから、神戸から東京へ行つて君の寓居を訪ねると、病氣で大磯へ轉地療養に行つたといふ、それ程の病氣なら、令妹の所へ鳥渡位報知がありさうなものだと、實は不審に思ひながら此方へ来ると、君は存外健康體であつたから大に安堵をしたと云ふ次第だ。イヤ安堵と云へば、肝腎吾輩の齎して来た要件、それを君が早速快諾して來たのでなによりも安堵した。」

「那樣に重大に考へて來たのかね。」

「ウン随分重大に考へた、最初の内靜江さんが高島格太郎に對する感情は、恰も仇、

敵の如きものであつたから、或は君も同様の感情を有つてをりはしまいかと、頗る懸念してやつて來たのだ。」

「ナル程高島純藏には、僕の一家は随分苦しめられた。何つか一度此の怨恨を、返してやりたいと考へた事もある」と、漫に過去を追懐するものゝ如く「然し今日考へてみれば、高島純藏が不條理に、僕の父から財産を奪つたのではない、約り情實を容れられなかつたに過ぎないので、理窟詰にする怨むはうが無理かも知れない、況や本人は死んで了つたものを、其の子孫にまで遺恨を含むといふのは、餘り執念深いと云ふものだ。法律でも罪はその子に及ばない、靜江は流石女性だけに、飯迄氣を狭く考へたのだらう。」

「そりや何うしたつて男子のやうに行かん。又前からの事情を聴けば、随分無理もないのだから、吾輩も強て説伏することも能さず、見す／＼有益な事業も、此關係のため一時中止の姿になつて、非常に遺憾に思つてゐたが、漸く靜江さんも先方の至

誠まことに動かされ、君きみの承諾しょうたくさへあればと云ふことになり、今亦いままた君きみの快諾くわいたくを得たのだから吾輩わがはいは勿論もちろんのこと、定めし高島たかしまも大満足だいまんぞくをするだらう。

「先刻さつせき君きみから聞いた處ところによると、其そのの格太郎かくたろうといふ人は、一個いっこの社會主義者しゃくわいしぎしやであつて、其そのの主義しぎを實行じつこうする爲ために、父ちちから受継うけついだ財産ざいぜんの全部ぜんぶを、抛なげつといふ決心けつしんであるさうだが、極端きょくたんな個人主義者こじんしぎしやの子こに、社會主義者しゃくわいしぎしやの出來できたと云ふのも、烏渡くわつこ面白い問題もんたいだね。

「要えいするに最初さいしよは父ちちが社會しゃくわいに失うつた同情どうじやうを挽回ばんくわいする策さくとして、慈善じぜん的事業じぎやうを研究けんきうした結果けつこ、社會主義しゃくわいしぎの眞理しんりに觸ふれて、遂つひにその主義しぎの實行者じつこうしやになつたのだね。然しかし社會主義しぎは、大おほいに世人せいじんから誤あやられてゐる、彼の佛蘭西フランスの如ごとき共産主義者きやうさんしぎしやも、又またルイブランルイブランの如ごとき國家社會主義者こくかしゃくわいしぎしやも、同一どういつに見みて批評ひひやうを下くだす。畢竟ひつぎやう世人せいじんが社會問題しゃくわいもんたいといふ事ことに注意ちゆういを缺かくのと、亦また研究けんきうの足らぬのに原因げんいんするのだが、一つは社會主義しゃくわいしぎを標榜はうして、徒いたづらに破壊はくわい的行動てきかうどうを取る人物じんぶつがあるから、大おほいに世人せいじんの惡感あくかんを招まねいてゐるのだ。

らう。吾輩わがはいの如ごときも實じつは社會主義しゃくわいしぎを排斥はいせきした一人ひとりであつたが、つらく慮おぼふに社會問題しゃくわいもんたいは社會しゃくわいの不調和ふてうわから發はる疾病しつびやうであつて、之これを輕微けいびの内うちに治療ちりやうを加へぬと、遂つひには恐おそるべき結果けつこを生しやうずる。若もし亦また病源びやうげんを究きめず病氣びやうきのみを見て、猥みだりに手療治てりやうぢを加へやうとするものがあつたらそれこそ間違まちがひの種たねである。彼のビスマルクビスマルクですら、社會主義しゃくわいしぎを撲滅はくめつしやうとして、却かへつて社會主義者しゃくわいしぎしやの勢力せいりきを増まし、結局けつこ社會政策しゃくわいせいさくを採用さいようするやうになつて、勞働者保險法らうどうしやほけんぽうなども編制へんせいしたのだ。又また日耳曼ルマンが鐵道國有てつどうこくいうや煙草專賣せんばいをやつたのも、やはり此この主義しぎの實行じつこうに過ぎすぎないので。日本にっぽんの政治家せいじかのやうに、徒いたづらに國費こくひを膨脹ぼうちやうさせて、其そのの埋合うめあせにするのとは譯わけが異ちがふ。

(六十八)

退役軍人たいえいぐんじんは何いつか熱心ねつしんなる社會主義者しゃくわいしぎしやになつて居ゐる。

『社會主義しゃくわいしぎをプラトプラトの共和國きやうこくやムーアのニートビヤのやうに思おもふのも空想くうきやうに近い

が、又これを害悪視するのも時勢遅れの謬見だ。抑壓、迫害の歴史を有らつゝ、現時
 歐米に於ける市政の大勢は、已に社會主義の勝利を示してゐるのでないか、素より
 此社會問題は、その人によつて種々に解釋されるが、高島は歐米諸邦で現に實行しつ
 ゝあるものを參酌して、先私人的に貧困救済から創め、それから徐々に國家的事業に
 移さうといふので、吾輩も之に賛成した。西洋では此の主義を以て、宗教家が木賃宿
 を經營したり、又大學の教授連が貧民窟へ来て學校を設け、又は講演會を開いたりし
 て居るさうだが。君も大學病院に居るのが不平ならば寧ろ我々の同志となつて、人體
 の病理研究と共に、社會の病理研究をやつたら什麼だ。君が同盟に入るといつたら、
 必ず高島も歓迎して、君が洋行の希望の如きは、渠のほうから進んで費用を辨じら
 らう。獨逸は破壞的にあらずんば空想的であつた、佛蘭西の社會主義を、現實的に完
 成した所だから、醫學の研究と共に、社會主義の研究には頗る便利だと思ふ。』
 黙つて耳を傾けてゐた静枝の兄は、此の時突然足を止めた。

『人を救ふも社會を救ふも、歸着點は同じだなア』
 獨言のやうに云つて武彦に向ひ。
 『寺岡君、今の言葉で僕は決心したが、然し君等の同盟者が、僕を歡んで迎へるだ
 らうか』。

『決心！。ウムこりや愉快だな。愈事業をやる曉は、無論多くの人員を要する
 し、殊に家屋の建築その他、衛生的設備については、是非共醫學上の智識ある人を招
 いて、萬事指導を受けることにするといつて居たのだから、我々に取つては最も好都合
 だ。況や静枝さんの令兄といふのだから、高島も至誠を以て歓迎するだらう。今は
 同盟といふても高島と吾輩夫婦、今度静枝さんと君を入れて、僅か五人限りよりない
 ので、追つては各方面に就いて、温厚着實な熱心家を招聘し、鞏固な團體を造らうと
 云ふ計畫だ』。

『然し世の中は不思議なものだね、是れ迄敵と思つてゐた高島純藏の子と、俄に握

手をやるやうになると云ふのは——』

『それも爾うだ』と云ひながら思ひ出したやうに『イヤ吾輩は此の大磯に未だ用事のあつたのを忘れてゐたが。ハテ、是れから訪ねてみやうか』

『訪ねるつて、誰を訪ねるのかね』

『ウン、そりや斯ういふ理由なのだが吾輩未だ逢つたことはないが、高島格太郎に朝江といふ妹があつて、兄とは正反對に虚榮に憧れ、仲小路美智磨と云ふハイカラ華族と結婚しやうと云ふので、家出をして東京へ来て、元高島の處に事務員をして居た、阪口と云ふものゝ家に寄寓して居るが。素々此の結婚は華族のはうから、財産を當てに申込んだ疑ひがあるのと、其の人格にも不信用な點があるといふので、華族から再び人を以て結婚の申込みがあつたが、猶且格太郎は拒絶をしたのださうだ。然るに今度兄のはうが、静枝さんの事から心機一轉——イヤ君の前では言ふを憚るが——要するに自分の戀の切なかつたのから、他の戀の切ないのをも察して、結婚を許す。

財産も分けてやらうといふので、今度吾輩が此方へ来るについて、萬事を委託されたから、今日東京で君を訪ねた足で、淀橋町へ廻つて、今いつた阪口を訪ねると、仲小路と云ふのが此の大磯に来てゐるので、それに逢ひに、朝江も大磯へ行つたといふ。鳥渡様子を訊いた所では、華族と云ふのは朝江は勿論、阪口といふものまでも欺いて策略上東京へ引張り出したらしく、今では朝江も目が覺めて後悔して居るといふことだから、寧ろこの際利害を説いて、一緒に神戸へ連れて歸らうと思ふのだが君。瀧龍館と云ふのは此の近所か』

瀧龍館は此の海岸濱まで、餘り遠くはない。

『序だ散歩しながら、一緒に行つてくれんか』

『行つても宜いが。僕が一緒ぢや異しかないか』

『ナニ關ふまいさ』と、言ひながら向ふを透して見て『オヤ、變だぞ。暗い波打際に婦女が立つて、何うやら泣いて居るやうだ。投身ぢやあるまいか』

『投身らしい……』

(六十九)

浪は人を吞まうとする、人は浪に吞まれやうとしてゐる、浪の色は黒い、人の影も黒い。星は空に死の神の眼と光つて、人の命を呪つてゐる。

黒い影は動き出した。下駄を脱いで跣足になつたやうである。汀近くへ寄つた時にドツと巨浪が来たので、よろしくと身を引いた。サツと引く潮につれて、又身を進める、又浪が来る、又身を引く。斯んなことを二三回やつて、今度は雪と咽ぶ浪の中へチリ／＼と足を運ぶのであつた。一步は一步より深い。あなや、浪の手は黒い影を攫つて行かうとした一刹那!!!

暗中を躍り出た二人の男は、力を合せて黒い影をスル／＼と引摺つて来て、手を放すとバツタリ砂上に倒れた、それは蠟細工の人のやうに、血の氣の失せた朝江である。

る。

『危かつた』と大息を吐いたのは武彦であつた。

静枝の兄も呼吸が迫つてゐる。

『何うしたですか。夜中海へ入るなんて——貴嬢自殺しやうと云ふのでせう——充らんことだ』

朝江は砂の上に平伏して、聲も立てねば身動きもしない。

『一體貴嬢は何處の人ですか。又何んで自殺なんぞしやとうするのですか。モシ御婦人』

武彦は肩に手を掛けて引起さうとする。

『マア待ちたまへ』といつて静枝の兄は身を摺寄せて『何うして死なうといふのか事情をお話しなさい。斯うして我々の留めた以上、貴嬢を見殺しにすることは能きんです。若し事情をお話があれば、勢ひ貴嬢を警官へ渡して、保護を頼まねばなりません』

せん。そんな事をして貴嬢の身分や名譽を傷けることがあつても可かんでせう、我々は誓つて秘密を守ります。可いですが、解りましたか』

朝江は首肯いたのみ黙つてゐる。

「サア解つたら聽きませう。貴嬢は何處のお人です。此の大磯ですか』

「神戸で御座います』と朝江は僅に頭を上げた。神戸と聞いて武彦は横顔を覗かうとしたので、恥て又深く顔を俯向けた。

「それで此の大磯へ被來になつたのは——』

「濤龍館に訪ねる人がありまして……』

「濤龍館に？」と武彦を見る。武彦は耐へかねて。

「甚だ失敬だが、貴嬢朝江さんと仰有りやせんですか』

「エ……』

我れを忘れて朝江は二人の顔を仰ぎ見たのである。其の鬚子に武彦は寧ろ狼狽の

體で。

「爾うですか？。イヤ爾うでせう。何うも神戸と云ひ、濤龍館と云ふので、吾輩爾うであらうと思つた。實に天祐だ。好い所へ來合せたものだ、最う一足遅からうものなら吾輩貴嬢の兄さんに、申譯のない事になつた所だ』

「チャア君が今、濤龍館へ訪ねるといつたのは此のお方のことか』

「ウン爾うだ』と云つて暫く考へ込み、『朝江さんとあれば、貴嬢が海へ投じて死なうといふ、其の事情も大體思ひ當ることがある。今此處でお話しを聽かんでも宜しいから、兎も角我々の宿へ被來なさい、吾輩は寺岡武彦と云つて、猶且神戸に住み、貴嬢の兄さんの格太郎君とは、近頃至つて親密にするものです。今度此方へ來るについで、格太郎君や御母堂から、貴嬢のことを萬事頼まれて來たので、今日東京の阪口さん所へお訪ねしたでしたが、此地へ來られたといふので實は是れから濤龍館へ、貴嬢を訪ねて行かうとしてゐたのです。それから此の同伴の人は、これも格太郎君が

悪意にする、静枝さんといふ人の令兄で、醫學士の松木貞一君です。他に遠慮をする者もない、斯んな所に居て人に見られては宜しくないから、サア、行きませう。貞一も又口を添へた。

『宿の者にも今の事は、悟られないやうにしますから御安心をなさるがよろしい。二人から親切に云はれて、漸く朝江は身を起した。』

(七十)

松林館に来て、武彦は朝江から今日の始末を聞いた。

虚榮の戀は夢のやうに覺めて、残るは恥多き身一つである。今まで欺かれて居た怨みを思ふ儘に言つて、胸が透いたやうにも思はれれば、亦わざわざ嘲けられに來たやうな氣もして、更に新しい憤りが、焰となつて身を燬くのである。濤龍館を去つて大磯停車場へ來ると、恰度汽車が今出た處であつた。次の發車迄には二時間程ある

待合室に入つたが、人から見られるのが厭はしい。フラ／＼と海岸のはうへ出て、過去つたことを思へば、無念の涙や悔恨の涙が留度もなく出る、目的もなく歩いて居る内にいつか日は暮れて、ハツと氣のついた時は、又もや汽車の時間に外れてゐる。然し東京へも歸りたくない、阪口一家の運命も今日明日に迫つてゐる。自分は之から何う身の處置をつけやう、神戸へも歸れぬ、寧ろ死んで了つたらと思ひつくと、他に思慮も分別も失つて、頻に海の底が戀しくなつた。といふのが朝江の詐りのない述懐であつた。

武彦は自分の身の上から、又格太郎と悪意になつた來歴、及び今度自分が朝江の事につき、依頼を受けて來た事情を語り、更に言葉を改めて、

『失敬なことを云ふやうですが、畢竟貴嬢が今日の結果を招いたのは、多くの女子に通有性となつて居る、其の虚榮心に驅られたからで……。然し未だ可かつたです。若し今日貴嬢が仲小路との會見に、乗が馬脚を露さなかつたら、格太郎君から財

産を分與られると聞いて、再び貴嬢を籠絡し。忽ち結婚が成立するでせう、爾うなつたら貴嬢は全く虎狼の餌となつて、將來必ず今日以上の苦痛を與へられるのみか、終生拭ふ可からざる汚辱を被るのでした。斯うなると格太郎君に、先見の明があつたと謂はなければなりません。悪いことは言はんですから、死ぬなどいふ短慮は止めて吾輩と共に神戸へお歸りなさい。格太郎君も定めて安堵をするでせうし、殊に御母堂は、何んなに悦ばれるか知れんです。』

『ハイ、ハイ』と答へて、朝江は涙を拭ふのである。貞一も言葉優しく。

『それが可いです。而うして御令兄の事業に、貴嬢も助力をされるやうにしたら、一層満足されるでせう。高島家を敵として居た我々兄妹さへ、格太郎君の至誠に感じて、同盟者にならうと云ふのです。女子として働くべき方面も大分あるやうに聞きました。』

武彦は膝を打つて。

「こりや宜い所へ氣がついた、歐米には婦人で社會的の爲に、獻身的に働いてゐるものが随分多いと云ふから、婦人連で視察をして來るのも面白からう。ネエ朝江

「ハイ、何うぞ宜しう御願ひ申します。』

初めて晴々しく答へたのである。

此夜武彦は殊更濤龍館に仲小路を訪うて、格太郎から結婚承諾のと及び財産分與の事を委託されて來たが、今はその必要を認めぬので、朝江を連れて神戸へ歸るといふことを、諷刺的に通告した。仲小路は一種名狀すべからざる顔色をしたといふことである。

三人は翌日一旦東京へ引揚げ、武彦と朝江は、其の夜の汽車で神戸へ戻ることになつた。新橋ステーションへ只單身見送りに來て、宛ら放心をしたやうになつて居る、阪口昌雄の惨めな姿を見、又お浪のことを考へると、朝江は堪へ難い程氣の毒な感じ

がした。

頃が松木貞一も、大學を辭して神戸へ来る。彼の貧民窟に近い葦合新川の廣い空地に、大規模の建築工事が起され、格太郎と武彦と貞一とは、交るく監督に来てゐる設備の大體を云ふと、貧兒教育に供する學校を中身にして、改良長屋がある、改良木賃宿がある。

事業の本質は素より慈善であるが、然れど慈善と云ふことは、肉體的に之を救ふも精神的に之を救ふことがある、且は限りある財力を以て、限りなき貧困を救済することは能きぬから、學校事業を除くの外、木賃宿も長屋のほうも、最減程度に於て宿賃及家賃を取り、亦消費組合式に市場も置いて日用品を廉價に供給し、之にも應分の手数料を收め、別に貯金法を設け、娛樂機關を備へ、又は講演會をも開いて、智識を興へ、怡安を興へ、勤勉、貯蓄、禮節等の良き習慣に導きつゝ、一方事業の永續を計るといふ、これが三人で極めた大方針であつた。

然し社會主義者としての理想は、斯かる些々たる事業を以て満足され得べきものでない。渠等は更に何物を求め、又何事を計畫するであらうか。

黒 胡 蝶 (終)

明治四十二年一月一日印刷
明治四十二年一月五日發行

黑胡蝶

金四拾錢

著者
所
有
權

著者 根本吐芳
發行者 杉本要
印刷者 堀越幸
大阪市東區北渡邊町八十九番屋敷
大阪市西區阿波座貳番丁等番地

發兌元

東京市京橋區中橋廣小路
(電話本局五七七番)
大阪市東區北渡邊町
(電話東京二八三番)

梁江堂書店
杉本梁江堂

田山花袋氏著 ◎ 鏑木清方氏畫

小説 草籠

裝釘類美	全	一	冊
定價金	五	拾	錢
郵送料	金	八	錢

草籠は小説三編を輯めたり、第一は山中に清く美しく戀愛を描き、第二章は青年畫家が狂熱と感溺とを描き、第三は信濃の田園に於ける一農家の悲惨なることを記せり。而して著者は之を描くに忠實なる態度を持し、つとめて其真にそむかざらんことを期せり其序に曰く「籠に入れたる草は或は無名の雜草ならん、されど雜草にも自然の面影見ゆべし」とは著者の意見なり。切に大方諸君の一讀を乞ふ。

佐藤紅綠作 ◎ 鏑木清方氏畫

小説 ほだ

裝釘類美	全	一	冊
定價金	四	拾	錢
郵送料	金	六	錢

自然主義！自然主義！之れ現代思潮の裏面に於ける智と情との意識の衝突に外ならず。著者は自然主義を標榜するものされど本書が肉慾描寫以外何物も含み居らざるや！否自然主義を眞面目に解決せんとする者乞に一讀を給へ

259
19

